

教育史だより



第8号（平成26年8月27日更新）

占領下の図書館～「CIE 図書館」と「カマボコ図書館」～

昭和21年1月当時、神奈川県内の図書館は50館あり、そのうち5館が全焼あるいは一部焼失の戦災に遭っていました。

戦後の県内図書館の復興は、神奈川県図書館協会の主導で昭和22年以降進んでいきました。その中で、日本の「民主化」に向けた国民教養のために、連合国最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）が設置したCIE図書館や、神奈川軍政部が設置した（通称）カマボコ図書館の運営方式は、図書館経営の一つのモデルとされました。

1. 総司令部民間情報教育局インフォメーションセンター（SCAP CIE Information Center）

占領下の日本において、GHQの民間情報教育局（CIE）は民主化政策の一環として、図書館機能と文化活動の場としての機能を併せ持つ施設である「総司令部民間情報教育局インフォメーションセンター」（CIE図書館）を、昭和20年11月の東京での開館を嚆矢として昭和23年末までに全国に17館設置しました。昭和23年8月31日開館の横浜CIE図書館は、14番目に当たります。場所は中区北仲通の海員会館で、設備、備品等は県が負担し、図書や雑誌は米軍基地の図書館、出版社等からの寄贈による英文資料が大半でした。入館者は最初の5日間で1万3千人を超え大変盛況だったようです。

横浜CIE図書館は昭和27年の講和条約発効後は、「アメリカ文化センター（ACC）」となり、在日アメリカ大使館の管理下に入りました。昭和42年に閉館した後、その蔵書は昭和29年に開館した紅葉坂の県立図書館に引き継がれ、「ACC文庫」と呼ばれました。

2. 神奈川軍政部インフォメーションセンター（KMGT Information Center）

神奈川軍政部は県内の市町村に図書館設置を勧奨するとともに、占領軍の兵舎を提供し人件費や運営費は自治体に負担させる方法で、県内各地に「インフォメーションセンター」を11館設置しました。その形から「カマボコ図書館」と呼ばれたこのセンターは、米国の図書や“LIFE”、“TIME”などの雑誌類を備えた図書館であり、最新情報の発信源であり、集会場など文化活動のセンターでもありました。いわば、前述のCIE図書館の神奈川

軍政部版といえます。ここでは、スクエアダンスやファッションショーまで行われており、日本人にとってはアメリカ文化に直接触れることのできる場でした。

「神奈川軍政部月例活動報告書 1948年12月」より抜粋

新図書館は川崎駅と映画館街の間の格好の街角に位置している。来館する者を注意してチェックすると、カマボコ型兵舎の神奈川軍政部インフォメーションセンター3号は、横浜、大阪、東京のCIE図書館に比べて、毎日足を運ぶ者の数が多いことに気が付く。

(中略) こうした状況の鍵になるのは、戦略上良い場所を注意深く選んだこと、カマボコ型屋根の中古プレハブ兵舎が日本人にうけがよかったということ、加えてアメリカの古本と古雑誌を200～300冊置いたことである。日本人が電気を引き、机や椅子等の備品その他のものを整えた。

この資料からカマボコ図書館が設置された当時の様子を伺うことができます。

川崎のほか、鎌倉、大船、逗子、三崎、秦野、高津、小田原、鶴見、弘明寺、相模原にも設置されました。

<参考資料>

神奈川県教育委員会 1965 『神奈川県の教育十五年』

神奈川県立図書館・音楽堂 1965 『神奈川県立図書館・音楽堂10年史』

神奈川県図書館協会 1966 『神奈川県図書館史』

神奈川県立総合教育センター2010 『神奈川軍政部月例活動報告書（教育及び民間情報）増補改訂版』

神奈川県図書館協会 統計「神奈川の図書館」2013年版

問合せ先

神奈川県立総合教育センター
学校教育支援課 学校支援班
(0466)81-1659